

1	2	(3)	4	5	(6)	(7)
委員名	項目番号 (e.g. 3.1)	節番号 表等 (e.g. 表 1)	コメント の タイプ	コメント内容	修正案	主査意見 on each comment submitted
桑原	3項以降のすべての関連箇所		ge	JIS Z 2241 (2011) ではいわゆる「公称ひずみ」を「伸び (%)」と呼んでいます (2011 年以降に改訂されておりますでしょうか?)。また、塑性力学では、「塑性ひずみ」と呼べば、通常は「真 (対数) ひずみ」を意味します。従いまして、JIS Z 2241 との整合性の観点から、右のように呼称を変更・統一することを提案します。	「塑性ひずみ」を「塑性伸び (%)」に変更 「真塑性ひずみ」を「塑性ひずみ」に変更	原案のまま 規格の名称を「塑性ひずみ比試験方法」としており、Z2253(加工硬化指数試験方法)でも用語として、「塑性ひずみ」を用いているため、混乱を回避するため、「塑性ひずみ」という用語は、そのままとさせていただきます。 また、「真塑性ひずみ」は、ISO 規格において、2020 年改訂において"true strain"を"true plastic strain"に修正しておりますので、これに整合させました。 Z2241 との整合性につきましては、ご指摘の趣旨を踏まえ、将来的な課題とさせていただきます。
田中	2		ed	右欄の JIS 規格を追加	JIS B 7721 引張試験機・圧縮試験機－力計測系の校正方法及び検証方法	採用
田中	2		ed	規格名称の修正	JIS B 7741 一軸試験に使用する伸び計システムの校正方法	採用
田中	2		ed	右欄の JIS 規格を追加	JIS Z 2254 薄板金属材料の塑性ひずみ比試験方法	原案のまま Z2254 は、この規格です。
桑原	3 および 4		ed	3 項で様々な記号が現れるので、記号の説明は 3 項の手前でなされる方が適切かと思います。	4 項と 3 項の順番を入れ替える。	原案のまま JIS Z 8301(規格票の様式及

1	2	(3)	4	5	(6)	(7)
委員名	項目番号 (e.g. 3.1)	節番号 表等 (e.g. 表 1)	コメント の タイプ	コメント内容	修正案	主査意見 on each comment submitted
						び作成方法)において、箇条 3 までは、必須要素に位置付けられており、これに従うことが認定機関に求められています。
田中	3.1	注釈 3	ed	式中の自然対数記号を立体に修正	$\ln \rightarrow \ln$	採用
JFE	3.	3.2 注釈 3.3 注釈	Ed.	3.2 において、注釈 3 の内容が、3.3 では、注釈 1 に記載されている。	注釈の記載順を統一されるのが望ましい。3.3 の 3.2 に合わせる。	採用
田中	3.3	注釈 1	ed	字句の修正	試験方法、及び評価方法、組成ひずみ量 → 試験方法、評価方法及び組成ひずみ量	修正採用 試験方法・評価方法・(塑性ひずみ量又は塑性ひずみ範囲)を意図しております。 “試験方法、評価方法、及び組成ひずみ量(塑性ひずみ範囲)”と致します。
田中	3.3	注釈 2	ed	下付き添字の“0”を削除	$r_{045/\alpha-\beta} \rightarrow r_{45/\alpha-\beta}$	採用
JFE	3.	3.3 注釈 2	Ed.	最終行カッコ内 r_{045}/\dots この 045 の 0 は不要と思われます。	同左	同上
桑原	4	表 1		a_1, b_1, L_1 の説明文。「試験力を解放する」と言えば「試験力を付加する」ことは暗黙の裡に想定されていると考えます。	「試験力付加及び解放後の…」を「試験力解放後の…」に修正する。	原案のまま 規格としては、手順どおりに規定するのがよいかと思われます。
桑原	5	4 行目		「仮定」を挿入	塑性変形の前後での体積を一定と 仮定 し	採用
桑原	5	b) の 2 行目以降		ひずみが同じでも原寸法が大きいほど変形量も大きくなります。ゆえに、「変形」の大小ではなく、「ひずみ」の大小で記載するほうが適切かと存じます。	塑性ひずみ比が 1 より大きい場合、 試験片の厚さ方向の塑性ひずみよりも幅方向のその方が大きい ($ e_{p-bl} > e_{p-al} $, 図 1 参照)。塑性	修正採用 ISO 規格では、“deform”と表現されており、「変形」としま

1	2	(3)	4	5	(6)	(7)
委員名	項目番号 (e.g. 3.1)	節番号 表等 (e.g. 表 1)	コメント の タイプ	コメント内容	修正案	主査意見 on each comment submitted
					ひずみ比が 1 よりも小さい場合、試験片の幅方向の塑性ひずみよりも厚さ方向の塑性ひずみが多い ($ \epsilon_{p,bl} < \epsilon_{p,al} $, 図 1 参照)。塑性ひずみ比が 1 の場合、試験片の幅方向と厚さ方向の塑性ひずみが等しい ($\epsilon_{p,b} = \epsilon_{p,a}$ 図 1 参照)。	したが、ご指摘の趣旨を踏まえ、以下のように修正いたします。 塑性ひずみ比が 1 より大きい場合、試験片の塑性ひずみは、厚さ方向よりも幅方向の方が大きい ($ \epsilon_{p,bl} > \epsilon_{p,al} $, 図 1 参照)。塑性ひずみ比が 1 よりも小さい場合、試験片の塑性ひずみは、幅方向よりも厚さ方向が大きい ($ \epsilon_{p,bl} < \epsilon_{p,al} $, 図 1 参照)。塑性ひずみ比が 1 の場合、試験片の塑性ひずみは、幅方向と厚さ方向とが等しい ($\epsilon_{p,b} = \epsilon_{p,a}$ 図 1 参照)。
桑原	5	図 1		同上	2：厚さ方向の塑性ひずみより幅方向の塑性ひずみが多い試験片 ($ \epsilon_{p,bl} > \epsilon_{p,al} $) 3：等方性材料 [幅方向及び厚さ方向の塑性ひずみが等しい ($\epsilon_{p,b} = \epsilon_{p,a}$)] 4：幅方向の塑性ひずみより厚さ方向の塑性ひずみが多い試験片 ($ \epsilon_{p,bl} < \epsilon_{p,al} $)	修正採用(同上) 2：塑性ひずみが、厚さ方向より幅方向の方が大きい試験片 ($ \epsilon_{p,bl} > \epsilon_{p,al} $) 3：等方性材料 [塑性ひずみが、幅方向及び厚さ方向で等しい試験片 ($\epsilon_{p,b} = \epsilon_{p,a}$)] 4：塑性ひずみが、幅方向より厚さ方向の方が大きい試験片 ($ \epsilon_{p,bl} < \epsilon_{p,al} $)
田中	6		ed	平仮名に変更	試験機の内, → 試験機のうち,	採用
JTM	6	本文	te	ここでは伸び計の説明をしているのではないのでしょうか？本文そのまま解釈しますと 試験方法 1 に適用する試験機, 及び試験方法 2 に適用す		原案まま この箇条では①試験機 ②長さ及び幅の測定に用いる装置

コメントのタイプ： ge = 一般的 | te = 技術的 ed = 編集上

1	2	(3)	4	5	(6)	(7)
委員名	項目番号 (e.g. 3.1)	節番号 表等 (e.g. 表 1)	コメント の タイプ	コメント内容	修正案	主査意見 on each comment submitted
				る試験機の内、ひずみ解放後に試験片長さを測定する場合以外は JIS B7721 1 級以外の試験機でもよい（乱暴な言い方をしますと JIS B7721 でなくてもよい？）と解釈できますがそれで大丈夫でしょうか。		<p>について、以下のように規定しています。</p> <p>①試験機は、試験方法に拘わらず、B7721 等級 1 級以上を要求しています。</p> <p>②長さ；ひずみをかけた状態の測定は、B7745 の 1 級以上、ひずみ解放後の測定は、±0.01mm 以内の精度 幅；±0.01mm 以内の精度とそれぞれ規定しています。</p>
JTM	6	6 行目	ed	…解放した後の幅測定装置は、…	…解放した後の幅を測定する装置は、…	採用
田中	6	注記 1	ed	語順の変更	試験方法 2 の場合 [伸び計だけを使用する方法 (8.3 参照)] ， → 試験方法 2 [伸び計だけを使用する方法 (8.3 参照)] の場合，	採用
田中	6	注記 2	ed	語順の変更	試験方法 3 の場合 [幅計及び伸び計を使用する方法 (8.4 参照)] ， → 試験方法 3 [幅計及び伸び計を使用する方法 (8.4 参照)] の場合，	採用
JTM	6	注記 4	te	<p>標点距離が短くても（短い大きさが不明ですが）ストロークがある場合は±0.01 mm を超えないとも限らないので、ISO 原文どおりに訳さず「長い標点距離を使用して」は不要かと思えます。もし入れるなら「例えば長い標点距離を使用するような」のような表現はいかがでしょうか</p> <p>また「大きな伸び計伸び」は「大きい」のかかる部分及び比較対象が不明なので「10 mm を超えるような大きい伸びを・・・」または「伸び計で大きな伸びを・・・」はいかがでしょうか</p>		<p>修正採用</p> <p>以下に修正します。</p> <p>長い標点距離を使用して、大きな伸び計伸びを適用する場合には、(以下略)</p>

1	2	(3)	4	5	(6)	(7)
委員名	項目番号 (e.g. 3.1)	節番号 表等 (e.g. 表 1)	コメント の タイプ	コメント内容	修正案	主査意見 on each comment submitted
田中	8.1 b)		ed	数値と単位又は比率記号との間に空白を挿入 (2 か所)	0.008/s → 0.008 /s ±20% → ±20 %	採用
田中	8.1 d)		ed	漢数字に変更	4 つの異なった → 四つの異なった	採用
田中	8.1 e)		ed	読点を挿入	調査方法は附属書 A → 調査方法は、附属書 A	採用
田中	8.1	表 2	ed	読点を挿入	標点距離は 20 mm → 標点距離は、20 mm	採用
田中	8.1	表 2	ed	読点を挿入	幅測定は均一な → 幅測定は、均一な	採用
田中	8.2.3		ed	読点を挿入	塑性ひずみは式(6) → 塑性ひずみは、式(6)	採用
桑原	8	8.2.3		単位の抜け	式の後には (%) を追記する	原案のまま 通常、式に対して、単位は付与しないかと思えます。 表 1 で e に対する単位は明確にしております。
田中	8.3.1		ed	送り仮名の修正	組み合わせに → 組合せに	採用
桑原	8	8.3.2		解放されるのは試験力であり、塑性ひずみは残留し解放されません。従って、「ひずみを開放する」よりも「試験力を開放する」が適切な表現かと存じます。	試験片を試験機に取り付け、所定のひずみを与えた後、試験力を解放する。試験片寸法の長さ測定は、試験力解放前後のいずれでもよい。 試験力解放後、...	採用
桑原	8	8.4.2		Bauschinger effect = 「バウシंगा効果」が通称かと存じますので、effect を「効果」と訳すことを提案します。	「Portevin-Le Chatelier 影響」を「Portevin-Le Chatelier 効果」に変更	採用
田中	8.4.3.1		ed	漢数字に変更	次の 2 つの → 次の二つの	採用
JFE	8.4	8.4.3.2 8.4.3.3	Ed.	評価方法について、 8.4.3.2 は、表題に英語がカッコ書きが付されているが、 8.4.3.3 は、そうになっていない。	記載をどちらかに統一されのが望ましい。	原案のまま 英語を付記した方が理解しやすいと判断した箇所だけに英語を付記しました。
田中	8.4.3.3	図 3 の題名	ed	“と” を削除	長さ方向との → 長さ方向の	採用

1	2	(3)	4	5	(6)	(7)
委員名	項目番号 (e.g. 3.1)	節番号 表等 (e.g. 表 1)	コメント の タイプ	コメント内容	修正案	主査意見 on each comment submitted
田中	8.4.3.3	注記	ed	読点を削除	材料の場合、) → 材料の場合)	採用
田中	8.4.3.3	注記	ed	漢字に変更	さらに高める → 更に高める	採用
JFE	9	一行目	Ed.	「平均塑性ひずみ比及び面内異方性 $\angle r$ 」となっており、平均塑性ひずみ比は記号が付されていない。	記載を統一し、平均塑性ひずみ比の後にも記号を追加する。	採用 平均塑性ひずみ比に“r”を付記します。
事務局	9		ed	“圧延方向に対して 0° , 45° 及び 90° ” の “0° ” は、他の箇所に合わせて “平行” に修正する。	0° ” を “平行” に修正する。	採用
田中	10 g)		ed	“を” を挿入	評価行った → 評価を行った	採用
JFE	10	h)	Ed.	「試験結果」の字体が一部ゴシックとなっている。	明朝体にする。	採用
田中	A.1		ed	“の” を削除	変化との信号との → 変化と信号との	採用
田中	A.2		ed	漢字に変更	見かけ上の → 見掛け上の	採用
田中	A.2		ed	漢数字に変更	3つの異なる → 三つの異なる	採用
田中	A.2	図 A.2 の題名	ed	漢字に変更	見かけ上の → 見掛け上の	採用
田中	A.2	図 A.2 の題名	ed	句点の挿入	大きな値となる) → 大きな値となる。)	採用
田中	A.2	図 A.3 の題名	ed	漢字に変更	見かけ上の → 見掛け上の	採用
田中	A.2	図 A.3 の題名	ed	“塑性ひずみ” を挿入	示している → 示している塑性ひずみ	採用
田中	A.2	図 A.3 の題名	ed	漢字に変更	小さい値となる) → 小さい値となる。)	採用
JTM	付属書 A	図 A.5 記号 1	ed	応力対長さ方向塑性ひずみ	応力と長さ方向塑性ひずみとの関係	採用
JTM	付属書 A	図 A.5 記号 2	ed	単一点の塑性ひずみと対長さ方向…	単一点の塑性ひずみと長さ方向…	採用

1	2	(3)	4	5	(6)	(7)
委員名	項目番号 (e.g. 3.1)	節番号 表等 (e.g. 表 1)	コメント の タイプ	コメント内容	修正案	主査意見 on each comment submitted
田中	A.2	図 A.5 の記号説明		“対” を削除	塑性ひずみと対長さ方向 → 塑性ひずみと長さ方向	同上
事務局	JA.2	注 1)	ed	"F"及び"S"を斜字体に修正する。	F/S ₀ →F/S ₀	採用
JFE	図 A.5	記号説明 2:	Ed.	「単一点の塑性ひずみと対長さ方向塑性ひずみとの関係」にて、「対」は不要と思われます。	同左	同上
JTM	付属書 A	図 A.6 記号 1	ed	応力対長さ方向塑性ひずみ	応力と長さ方向塑性ひずみとの関係	採用
田中	A.3		ed	読点を削除	測定することが、可能 → 測定することが可能	採用
田中	A.3		ed	読点を削除	可能であるので、好都合 → 可能であるので好都合	採用
田中	A.3		ed	読点を挿入	例えば R _{p0.2} の → 例えば、R _{p0.2} の	採用
田中	A.3		ed	読点を挿入	塑性ひずみは“0”に → 塑性ひずみは、“0”に	採用
田中	A.3		ed	読点を挿入	許容差は利用者の → 許容差は、利用者の	採用
JTM	付属書 A	図 A.8 と図 A.9 のタイトル	ed	選択した合格基準 (R _{p0.265} % 及び…	選択した合格基準 (65 %R _{p0.2} 及び…	採用
田中	JA.5 c)		ed	字句の修正?	平行, 45° 及び 90° → 平行 (0°), 45° 及び 90°	原案のまま 他の箇所(3.2 及び 3.3)も含めて、旧規格から変更しておらず、誤解は生じないと思います。
田中	JA.5 c)		ed	読点を挿入	共振周波数を JA.3 の → 共振周波数を、JA.3 の	採用
田中	JA.5 d) 1)		ed	“々” を削除?	各々の方向から → 各方向から	採用

1	2	(3)	4	5	(6)	(7)
委員名	項目番号 (e.g. 3.1)	節番号 表等 (e.g. 表 1)	コメント の タイプ	コメント内容	修正案	主査意見 on each comment submitted
田中	JA.5 d) 2)		ed	漢字に変更	有効数字 4 けたに → 有効数字 4 桁に	採用
JFE	附属書 JA	JA.5 d) 2)	Ed.	「有効数字 4 けたに丸める。」ここは従来 JIS も「けた」とかなですが、JIS Z8301 でも漢字を使用しており、桁でよいと思われます。	同左	同上
田中	JB 3 d)		ed	読点を挿入	材料について測定手順を → 材料について、測定手順を	採用
田中	JB 6 d).		ed	平仮名に変更	試験機の内、 → 試験機のうち、	採用
田中	JB 8 d)		ed	漢数字に変更	4 つの異なった → 四つの異なった	採用
田中	JB 8 d)		ed	右欄の文章は分かりにくい。		以下に修正します。 塑性ひずみ量が、材料規格・・・協定がない場合に採用する値を追加した。
田中	JB 9 d)		ed	漢字に変更	規定にあわせて → 規定に合わせて	採用
事務局	JA.2	注 1)	ed	"F"及び"S"を斜字体に修正する。	F/S ₀ →F/S ₀	採用